

## 目 次



|                          |                            |
|--------------------------|----------------------------|
| 創立二〇年記念講演<br>平和の水源を求めて   | ベシヤワール会現地代表<br>中村 哲        |
| クリスマス礼拝<br>神はなにゆえ人となられたか | 日本基督教団牧師<br>相愛幼稚園長<br>平良 修 |
| 愛真の日々より<br>感謝とお願い        | 理事長<br>小田 弘平<br>佐藤 全弘      |

## 愛 真

第74号

2008年3月

## 創立二〇年記念講演

## 平和の水源を求めて

二〇〇七年十月二〇日の創立二〇年記念講演会で話された講演と、それに続く質疑応答です。講演は、30分のビデオ上映の後、スライド写真を説明する形で行われました。

ベシヤワール会現地代表 中村 哲

(一)

こんにちは。中村です。一週間ほど前、現地から帰って来ました。また一週間後くらいに戻りますけれども、こうやって皆さんと話が出来ることを嬉しく思っております。特に世界がきな臭い世の中にあつて、日本中まわつてますが、こうやって平和を求めるといふ気持ちの人々が集まった場で話をするといふそのことが、何かほつとした気持ちにさせてくれます。

ところで今日は「平和の水源を求めて」といふ話ですけれども、私達のこの二十三年間の歩みをそのまま紹介いたしまして、後ほど質問の時間も充分取つてありますので、その中で何でもいいですから尋ねて下さつて、対話の中で話を深めていきたいと思っております。



まず、簡単に私達の会の歩みを紹介したいと思います。私達の会は「ペシャワール会」というように、パキスタンの北部のアフガニスタンとの国境地帯にあるペシャワールという町を基点としまして、アフガニスタン、パキスタンの両国にまたがって主に医療活動をしてきました。近年になりまして、皆さんはご存知ないかも知れませんがアフガニスタンは大干ばつの真っ最中でして、ジャララバードという所に拠点を置き、水源確保事業というのを進めております。主にアフガニスタン東部を中心に活動が続けておりまして、従業員が



約二百名、現地の人々、それから日本から手伝いにやって来た若者達が約二十名。それから作業員などを入れますと、多い時で約一千名の人々がこの事業に参加しております。これを支えるのが日本ペシャワール会という福岡にある団体で、年間の活動費約三億円はすべて日本中の人々からの寄付金によって成り立っております。

アフガニスタンというのは、日本にとって最も分かりにくい国の一つなんです。それでいくつか前準備として申し上げます。その一つはアフガニスタンは山の国だということなんです。東のネパールという国はよく知られておりますけれども、ネパールからのヒマラヤ山脈に続く、世界の屋根と呼ばれる所の西側をつくっている山岳地帯、これがヒンズークシ山脈で、標高が六、七千メートルから成り立っている山の国であります。国土は地図上の面積では日本の約一・七倍、人口は二千万人といわれておりますけれども、この殆ど九割以上は農民、お百姓さんですね。それから遊牧民、羊飼いで、こういう人達によって成り立っている農業牧畜国家ということが出来ます。この山とどうい関係があるかといいますと、現地の諺に、「アフガニスタンでは金が無くても食っていけるけれども、雪が無くては食っていけない」というのがあります。まさにその通りでして、この白い山の雪は見てきれいだと思えますけれども、単に美しいというだけではなくて命の源なんです。アフガニスタンの殆どの人は農村に住んでいて、自給自足の生活、お金は無いけれども自分達の

物で食べて暮らせるという生活をしております。こういった人々の生産活動の源となっていてのが、この白い山の雪です。冬に降り積もったこの白い雪、それから何万年もかけて出来上がった氷河が夏に溶け出して豊かな実りを約束してくれ、何千年だか何万年だか分かりませんが、人も動物も植物も命をつないできた地域であるということですね。このことはあまり知られておりません。乾燥した中央アジアで二千万人の人々を養っている命の源が、この白い雪だということなんです。

それからもう一つ、こういった地理条件のために谷が深いのですから、谷ごとに国があると言っているくらい色々な民族、部族が山を隔てて住んでいます。国というと、日本ならば東京のような首都があつて、選挙があつて、選ばれた国会議員が政策を決めて国中が動き出すという国を想像しますが、アフガニスタンという国は決してそういう国ではありません。これは良い悪いの問題ではなくて、地域地域の良く言えば自治制、悪く言えば割拠制が非常に強い所なんです。中央がどう動くかが、東京がどうい決定をしようが、島根は島根、福岡は福岡で動く、こういった地方地方の自治が非常に濃厚な所であります。しかもシルクロードの昔から民族の十字路と言われてきた所で、分かつているだけで二十以上の民族が、寄り合い所帯でこの谷あいに住んでいます。これがアフガニスタンという国家というまとまりを作っているというのが現実で、この点が非常に分かりにくいことであります。

す。日本で報道されている、これがアフガニスタンだという映像は、殆どが特殊な地域といわれる首都カーブルの映像であります。ここで起きた事がすべてアフガニスタンで起きているような錯覚を皆さんに与え続けて、ますます分からなくなってきたというのが現実ではないかと思えます。

このアフガニスタンの百パーセント近くがイスラム教徒であります。最も古典的で古風なイスラム教徒で成り立っております。イスラム教というと、日本に流されてくるニュースが自爆テロだの内乱だの血なまぐさい話ばかりですけれども、実際に現地に行ってみますと、その辺を歩いているおじさんおばさんと、皆さんちっとも変わらないですね。先ほどアフガニスタンというのは、地域がばらばらで自治制が強い





ということを言いましたが、そのばらばらの地域を結びつけているのがイスラム教で、各地域の中心には必ずモスクという我々という教会があります。そこが地域を治める要になっていて、警察もいらないければ精神病院もいらない。学校教育も自分達でやる。こういう地域の中心になるのはモスクでありまして、イスラム教は単に人々の信心というだけではなく、社会的な絆として存在しているということが、なかなか分かりにくい点でございます。

先ほど殆どの人々は農村部にいると言いましたが、都市部に行きますと貧富の差が甚だしく、私達、医療関係者として胸を痛めますことは、お金を持った一握りの人々は、ちよつとした病気でロンドンやニューヨークや東京に簡単に飛んで行って、治療を受けることが出来ますけれども、九九・九九%の貧しい人々は、数百円といわず数十円のお金が無くて死んでいく人が数知れません。いかに少ないお金でいかに多くの人々に恩恵を及ぼすかという、特別な配慮をせざるを得ない世界ということでございます。

### (三)

私達の活動は、一九八四年の五月、当時ベシヤワールで発足した「らいコントロール計画」、らいは現在ではハンセン病と呼ばれておりますが、私がこれに参加するという形で始まりました。私の任務は二千四百名の患者に対しての治療センターの充実ということでしたけれども、ハンセン病と

いうのは目や神経を侵されるということで、単に薬を与えるということだけではなく、手や足、あるいは眼科の手術をしたり色々な治療の局面があります。しかし当時これが出来る病院はありませんでした。しかも行ってびっくりしたのは、



動をやっている、手術もやっているということが分かりますけれども、実は私共の活動の大部分は、一見医療とは関係のない所に注がれてきたわけであります。

今でも最も苦勞するのが、患者つまり地域の人々のことをいかにして理解するかということなんです。それは実は外国だけでなく日本でも同じ事で、私達医療関係者は患者が何を訴えたいのか、どうして欲しいのか、何が悲しいのか、何が嬉しいのか、そういうことが分からないと、この治療関係というのは成り立たないですね。日本でもこれだけ医療訴訟が多いことの背景には、患者と医療関係者との間の信頼関係、つまり医者側の相手に対する理解力が欠けていると言わざるを得ない場合があります。これは外国でも同じですが、外国になりますと言葉も違えば文化も違うということで、理解するのに随分時間がかかりますね。三十年近く一緒にいる私の家内の気持ちもいまだによく分からないのに、習慣が違う、言葉が違うという中で、この人々の気持ちを理解するというのは、言葉では簡単ですけども、これは忍耐も時間も長いということなんです。

例えば現地の女性が被り物をするという習慣に對しまして、外国人が起こしやすい間違いといえますのは、こういう風に単に習慣の違いであるものや、自分達が見慣れないものに対して、善悪だとか、劣っていると優れているというように分けてしまつて、これを裁いてしまうことがしばしばあるわけです。六年前のアフガニスタン空爆の時に、この現地の

二千四百名の患者に對してわずか十六床しかベッドがないという状態で、この写真に写っているのは、当時あったすべての医療器具です。これで二千数百名を何とかしろというわけですね。ここにありますように例えば台ですが、足が一本折れているんですね。これは押すと倒れるんですね。それで二人で抱えていく。それから耳にはめると怪我をする聴診器が一本ある。それからねじれたピンセットが数本ある。ガーゼの消毒はどうやっていたかという、私達医療関係者は消毒ということをやかましく言いますので、消毒だけはきちんとしておりましたが、どうも効率の悪い状態であった。これは技術のいるもので、白いガーゼを金属のボールにつめまして、これをオープン、パン焼き機ですね、その中に入れる。ここからが難しい所で、煙が出かかったらすつと出す。そのままにしておくとも燃えてしまいますから、燃える前に出す。きつね色に焦げているのが消毒済み、白いのが未消毒という状態です。医療はよく物や金だけでなく精神が大事だと言われます。精神が大事なことは分かりませんが、物や金もある程度必要なんだということで、私達の活動が活発化しまして現在に至っております。

アフガニスタン全土とパキスタン北部で、現在合計約八千名のハンセン病患者が登録されており、更にその数が増え続けておりますけれども、ハンセン病の合併症については、私共の病院に送りさえすれば何とかなるところまで改善しました。こういう話をしますと、確かに私が医者で医療活



習慣に対して、これは許すべからざる女性差別であるということ、アフガニスタン人を非難する材料になったということとは、今でも忘れられません。実はこれは外出着でありまして、現地の女性にとつては何でもないのであります。西洋化された一部の人々がこれを女性差別だと言いましたが、現在でもこれを取っている人はおりません。私達としましては確かに不便なものでありまして、例えば聴診器一つ当てるにしても、女性の胸を開けて当てるとするのは非常に不道徳な行為と見なされるわけです。そのために診療がしにくいということがありますけれど、私達の基本的姿勢はこういった違いに対して、繰り返しますが、善悪や優劣のカテゴリーに分けて裁かないということを一つの鉄則としております。その文化の中で解決出来ることは沢山あるわけでありまして、女性患者ならば女性の医療関係者、医者、看護師、検査技師が診れば、これは現地では問題ないことです。そのために日本から女性ワーカーを沢山送って、この人達の診療に尽くしました。

国際的なものの考え方と称して、地域のこういった習慣なり相違を認めないという非常に狭くなるような考え方が最近流行しております。こういった被り物は人権侵害であると言いますけれども、私がそういう人々に言いたいのは、一体あなたの人権思想が大事なのか、それともこの女性患者自身が大事なのかということです。女性患者のことがそんなに心配ならばあなたが連れて行って面倒を見て下さい、と私達は言い

のは何なのかを探って実現する、これが医学というものではないかと私は思っております。



たいわけでありまして。そこに残って面倒を見なくちゃいけない家族はどうするのか、我々はどうしたらいいのか。やはりその文化の枠内で解決出来ること、色んな制約の中にあつて、この患者にとつて、今、私達に出来る最も幸せな状態という

#### (四)

私が参りました一九八四年は、アフガニスタン戦争の真只中。アフガニスタン戦争というのはい九七九年十二月、当時世界最強の陸軍といわれたソ連軍の精鋭部隊約十万人が大挙してアフガニスタンに侵攻するという事件が起こりました。その後十年間アフガニスタンは戦火に曝されまして、この戦争で死んだ者が二百万人以上といえますから、アフガニスタン人の十人に一人がこの戦争によって死亡する、六百万人が難民となって国外に流出するというのが起きてまいります。そのうち約三百万人が私達の診療所がありますベシヤワール周辺に逃れて来ていて、私達も医療の立場からこのアフガニスタン問題に巻き込まれて行ったわけでありまして。

初めの内は難民キャンプで少しずつ診療しておりましたけれども、私達はここで大きな方針の転換をはかります。それは私達が考えるような「らいコントロール計画」というのは、現地では通用しないということでありまして。これもまた、私達先進国と呼ばれる国が発明した一つの方法と言わざるを得なかった。どういうことかと言いますと、ハンセン病が多い所は同時に他の感染症、伝染病が沢山ある。腸チフス、結核、マラリア、デング熱、アメリバ赤痢など色んな伝染病の巣窟である。しかもこういった所には医療設備が殆どない。いわゆる無医地区ばかりでありまして、死にかけている人に対して「あなたはハンセン病でないから診ません」というわけにはいかないです。だから私達としましてはハンセン病の



多い地帯、すなわちアフガニスタンの山の中のいわゆる医療設備のない貧しい地区に、将来診療所を建て、そこを中心に住民全体を対象にして、ハンセン病だけを特別扱いせず、色んな伝染病の人達を診たい。そのために山の中の無医地区、医療設備の殆どない地帯のモデル診療体制を作るということを、もう一つの大きな目標に掲げるようになりました。

内戦中ではありましたが、私達はソ連軍の撤退するのを待ちながら、私は頭はともかく足だけは強かったので、国境を越えてアフガニスタンの中に入り、診療所開設予定地の人々と少しづつ付き合いを深めていったわけです。

これはノリスタンのワマーと言われる所で、アフガニスタンでは最も高いところに住んでいる民族の居住地の一つですが、当時ペシャワールから歩いたり時々ジープに乗ったりして最低一週間かかりました。これで驚いてはいけません。こういう所がアフガニスタンの山岳地帯の普通の村々だということです。首都カーブルは更に遠いということで、これがアフガニスタンの山岳地帯の普通の姿だということは、殆ど映像にも出ないし世界に伝わることはありません。

その証拠に私がこの村に行った時に、村長さんからフランス人と間違えられるということがありました。それまでチャイニーズかジャパニーズかと言われたことはありませんが、フランス人と呼ばれたことは初めてで、決して悪い気はしませんでした。後で知ったことは外国人を見るのが初めてだったんですね。村長さんはたまたまフランスという国を知って

いたので、聞いてみたということなんです。『いや、日本人です』と言うとですね、手の平を返したように親切にしてくれました。単に日本人であるために命拾いする、協力を得られて仕事がうまくいくということが、ごく普通にあったのです。皆さんに伝えたいのは、日本がアフガニスタンの人々



を殺すような活動に参加するようになりました。私達に対する敵意が少しずつ芽生えつつあるということです。このことはどうしてもお伝えする必要があります。

後ほど質問がありましたら詳しく話しますが、日本に対する感情の良さというのは、広島、長崎の惨禍を被った国で可哀想にというだけではなくて、その後あの惨憺たる状態の中から日本はみごとに経済的に復興を遂げた、ということを彼らは非常によく知っているんですね。経済的に羽振りの良い国というのは必ず戦争をする。しかし日本はあれだけの繁栄をしながら、半世紀の間、一度も軍隊を海外に送ったことがなかった。これに対する評価には絶大なものがありました。「どんなに経済的な利権が絡もうとも、武力で事を解決しない日本」という美しい誤解、これが根を下ろしていたわけです。これが日本のあるべき姿を示しているのであって、どんな状態になっても人殺しをしてまで食っていくような国家というものは必ず滅亡する。しかし今や、多少の利権のためならば軍隊による民衆統治も辞さないという実態が、少しずつみんなの間に分かってきたんですね。日本人であるために今度は攻撃の対象になるということが、本当に起こりつつあるということは知っておいていただきたいことです。

その後ソ連軍は十年もしないで撤退します。あの世界最強と言われた陸軍の精鋭部隊十万人をもつても制圧出来なかったわけです。「私達の国は有史以来外国人に制圧されたことはない」というのがアフガニスタン人の誇りであります。

アレキサンダーが攻めてきた頃からということなので、二千年数百年前からアフガニスタンは絶対に征服不可能な地域という特質が、私はまさかと思っていました。まさにソ連軍の撤退で実証されました。その後、一時的な色んな混乱を收拾して登場したのがタリバン政権で、イスラム主義の政権でありますから、これによって一応の国家統一が成りつつあった頃でありました。私達はソ連軍の撤退と合わせて、それを待っていたかのように活動を始めたわけでございます。山の中に三カ所の診療所が次々と建てられたのもこの頃でした。

そうこうするうち十五年経ちまして、どうも先が長いらしいということが分かりました。日本のハンセン病問題も世紀以上の時間が必要でした。まして何も分からない外国人がその場所に出かけて行って、数年活動しただけで何か成し遂げるということはあり得ないわけでありました。次々と皆が撤退していく中、「誰もやらなきゃ我々がやる」というのが我々の方針でありました。ハンセン病の問題もアフガニスタン問題も全く一緒ですけども、話題性のある時は皆がわっとやっけて人も物もお金も集まりますけれども、話題に乗らなくなる、そこに問題が残っているにも拘わらず、嘘のように皆の関心が薄れ、そして助ける人もいなくなっていくます。そういう現実の中で、私達一カ所くらいは頑張っ、これを半永久的にやり続けようということで、ペシャワールという地に診療所と病院を建てました。単に建物を建てたということではなくて、その地域に根を下ろしたい、何十年でも頑張ろう



ました。

しかし、現在のアフガニスタンは、私が活動してきた中で最悪の状態でありまして、あちこちに戦禍が広がりつつあり、一時撤退した診療所もあります。



アフガニスタンというのは非常に気の毒な国でありまして、やっと曲がりなりにも統一政権が出来て、さあ今からという時、私の活動も今からという時に襲ったのが、世紀の大干ばつ。これはものすごいものでありまして、二〇〇〇年の五月にWHO世界保健機関が発表した推移の報告は危機迫るもので、現在進行中のユーラシア大陸の大干ばつは、おそらく人類史上体験されたことのない規模で進行中である。二〇〇〇年五月の時点で六千万人が被災して、そのうち最も激烈な被害を受けたのがアフガニスタンで、実に人口の半分以上に相当する一千二百万人が被災しまして、五百万人がともにご飯が食べられない飢餓線上、それから百万人が餓死線上にあると報告されました。私達の診療所の周りにも、つい最近まで緑豊かな村があったのが、空っ風だけが吹き、本当に砂漠化して廃墟になってしまふ村が次々と増えています。その凄まじさは、到底日本では想像出来るものではありません。これがアフガニスタン中でも進行中であるということ、恐らく皆さんはご存知ないと思います。二〇〇〇年に始まった大干ばつは、その後年々悪くなるという状態です。初めに山の写真を見せましたが、あの白い山の雪が命の源である水を供給しているのですが、この雪が年々消えつつある。これがアフガニスタンにとって最大の危機であります。こうやって農業用水が無くなり、地下水が枯れるという状況で、続々と村人達が村を捨て都市に集まってくる。都市で食

べられなかったり、職が得られなければ、更に難民となってパキスタンやイランに逃れていくという状態が、二〇〇〇年以後今も続いているということです。

餓死者百万人と言っても皆さんピンと来ないと思います。ご飯が食べられないために体が衰弱して抵抗力が無くなってくる、その時に病気にかかってコロリと死んでしまうというのが、大抵の餓死の末期の状態です。診療所の周りでも一番多かったのは、若いお母さん達が自分の子どもをしっかり胸の中に抱いて、時には何日も歩いてたどり着くのは良い方で、外来で待っている間に母親の胸の中で死んでいくという姿は、普通に見られました。食べ物を食べなくても何週間も生きられますが、水が無くては人間二四時間と生きられない。子どもは欲望をどうしても抑えられませんか、つい生活排水、台所から捨てた水などの汚い水を飲むんですね。それで赤痢にかかる。赤痢くらいでは普通子どもは死にませんけれども、体が弱っているのですぐに脱水状態になって死んでしまう。私達の診療所で診ていまして、死者百万人というのは決して誇張されたものではないと思います。

砂漠の中に診療所があったって意味がないわけで、残った村人達の飢えや渇きというのは薬では治せない。病気の大半は、清潔な飲み水と十分な食べ物があれば罹らない病気が殆どであります。私達としましては、ともかく水が先だということ、残った村人達を集めて枯れた井戸を再生し、新たに井戸を掘り、村のあちこちに水源を確保する事業を始め

たのが、二〇〇〇年の七月のことです。今年の七月現在で約千五百ヶ所の水源を確保いたしました。これによって約三十の村、三十数万の人がともかく村を離れずに済むという、大きな仕事として現在も続けられております。







更に先ほど、アフガニスタンは農業牧畜国家であり、自給自足の国であると言いましたが、水が無くては自給自足もないわけで、耕すことも出来なければ羊を飼うことも出来ま

せん。その中で私達は、農業用水の確保ということにも力を

入れるようになりました。これは「カレーズ」と呼ばれる地元アフガニスタンで普通に見られる伝統的な灌漑方法で、要するに百数十メートルに横井戸を掘り、地下水を導き出して灌漑する方法です。名前はカレーズでありますけれどもこれが枯れるんですね。それで私達は診療所周辺の四十箇所のカレーズを修復いたしました。三、八箇所で水を出しました。その結果は素晴らしいもので、私達は改めて自然の恵みを実感したわけです。

これは一〇〇〇年の九月一五日、私の誕生日でしたのでよく覚えておりますが、診療所付近の状態、木が立ち枯れている状態でした。かつては緑豊かな水田であったと思わせるものは何もなかった。こういう所に早めに水を注いでやると、どういう状態になるかといいますと、七箇月後、これは同じ所なんです。緑に見えるのは小麦ですが、村の人々は水が戻ってきたという噂だけでどんどん帰ってくる。そして、自分達の畑に麦を蒔き自分達で生活出来るようにする。要するにそこで生活出来る条件を整えてやりますと、何も外国人がしゃりり出て来て、難民帰還プロジェクトという大げさな計画を立てずとも、平和な村の暮らしは取り戻せるということなんです。こうやって診療所周辺で約九千名の人々が自発的に帰ってきて、再び元の生活が出来るという状態になりました。

#### (六)

私達は、こういう状態が国際的な関心を呼ばないはずがないと期待しました。そのうち大勢の人々がやって来るだろうから、それまで我々は限られた地域ではそばそと、限られた仕事を限られた範囲でやって、頑張っておこうとしました。ところがやって来たのは国際支援ではなく国連制裁。二〇〇一年の一月、これがアフガニスタンの転換点でありました。

前年の二〇〇〇年一〇月、ペルシャ湾岸に停泊していた米国の駆逐艦が自爆攻撃でやられ、兵隊十数名が死亡するという事件が起こります。それに対する報復措置として国連制裁が決議されました。これを行ったのはアルカイダと呼ばれる国際テロ組織で、当時のカルバン政権がこれをかくまっていたという理由だけで、国連制裁が発動されたのが二〇〇一年一月のことでした。繰り返しますが、これがアフガニスタンの変わり目でありました。

制裁による結末というのは惨憺たるものでした。餓死者百万人という時に、食糧まで絶とうとしたことは忘れ難い。例えばこの会場の中に警察に追われている人が居るとい場合、入口を閉めて、ともかく水も食糧もやっちゃいけないという状態に等しいわけです。しかもアフガニスタンという国は最初に申し上げましたように、中央の政府がどういう風になるうとも、地方は地方で生きていくということでありますから、単に中央のしかした不始末によって、どうして我々

がこんな目に遭わなければいけないのかという、外国人に対する敵意が急速に拡大していったというのが事実であります。人間というのは追いつめられた状態では、どうしても過激な意見に流されやすい。そのためにタリバン内部でも、非常に狂信的な人々の発言が力を持つようになったということは、現在カーブルにあります当時の外相の証言で証明されております。

ともかくこれによって、その後バーミアンにあります石仏の破壊だとか、更に九月十一日になりニューヨークのテロ事件が起こると、その翌日からアフガニスタン報復爆撃などというのをアメリカのブッシュ大統領が言う。しかも十字軍などという物騒なことを言う。私もキリスト教徒のはしくれであります。聖書の中には報復をするなどは書いてありますけれども、報復爆撃などという物騒なことは一行も書いていません。しかも十字軍などという言葉も、聖書の中に一行も出てきません。報復爆撃などということを一キリスト教徒として言い得るのかという素朴な疑問を抱きました。我々が主張したのは、今アフガニスタンはそれどころではない、百万人が餓死寸前という時に、ご丁寧にもその上に爆弾を振り撒くのか、ということ。今アフガニスタンに必要なのは、パンと水の問題であるということを人々に訴え、武力というのは絶対に物事の解決にならないということも強く訴えたわけがあります。

そのために、まずは食糧が先だということです。当時カー



ブルに集まっていた百数十万人のうち、カーブルの冬は厳しいので、恐らく一割の人は冬を越せないだろうというのが、私達の確信でありました。空爆が十月になって始まりますと、空爆下の首都カーブルに約千八百トンの小麦粉を、餓死寸前の人々に送り届けました。

あの頃、日本人全体がどうかしていた。対テロ戦争という言葉を使いますと、みんなが納得するようなムードで溢れていた。そんな奴はやられて当然だと言うが、しかし誰がやられたかというと、実は何の罪もない人が何万人も命を落としたわけであります。命の尊さというのは、アメリカ人であろうとアフガニスタン人であろうと日本人であろうと同じでありますけれども、このニューヨークの犠牲者二千数百名に対しては、世界中から哀悼の言葉が述べられました。このアフガニスタン空爆によって死亡した何も罪のない人々数万人に対する哀悼の声は、世界からほとんど届けられなかったということ、残念な気持ちで思いつきであります。ともかく当時空爆の真つ最中、「誰か食糧配達に携わる者はおらんか」と言うと、二十人の職員が志願して現地に赴きました。

当時私が時々日本に帰って来てびっくりしたのは、まるでゲームでも見るかのように皆さんがテレビにかじりついて、今度はどこがやられる、あそこがやられる、作戦はどうだこうだという話を評論家のように、人ごとのように見ているという異常な姿でありました。ピカッと光って映る、あの空からの映像ばかりがずいぶん流されましたが、上から見ると花



火のように見えますけれども、下にいる者はたまったものではない。ピカッと光る度に、何十名、何百名もの人々が命を落としていたという想像力に乏しかったと思います。しかも

軍事評論家という人がこういう時は必ず現れて、皆を納得させるようなもつともらしい意見を言うんですね。アメリカの攻撃はピンポイント攻撃と言って、テロリストだけをやって、一般市民には迷惑をかけない人道的攻撃方法なんだということ、まことしやかに言う。とんでもない。我々は現場で見ただけですから。あれはほぼ無差別爆撃に近かった。死んだのは殆どが弱い人達。お年寄り、子ども、女の人達が主な犠牲者となったわけであります。こういう状態でありますから、二十名の職員を送り出しても一発の爆弾でやられますと、食糧配給が出来ませんので、これを三つの部隊に分けまして、たとえ一部隊が全滅しても、他の二つの部隊が食糧配給を継続出来るということで、無事食糧配給を餓死寸前の人々に行ったわけです。よく私一人で活躍するように言われますけれども、実はこの日本からの良心的な支え、経済的な支え、それから現地の人々の、同胞のためなら自分の命も惜しまない勇敢な人々、こういう人々によって私達の活動は支えられてきたわけであります。

その後二〇〇一年の十一月になってタリバン政権が首都カーブルから消える。それに代わってアメリカ軍およびその同盟軍が入ってくる。ここで世界中が錯覚に陥った。悪魔のようなタリバン政権が倒された、絶対の正義、永遠の正義と自由の味方アメリカおよびその同盟軍を、歓呼の声で迎える市民の映像が、世界中に盛んに流されました。これによって世界中がもの見事にだまされました。これでアフガ

ニスタンも色々あったけれども、何となく落ち着くのかなあという印象を残したまま忘れ去られていったのが実状ではなかったかと私は思います。あれはですね、誰が来ても迎えるというのが、カーブルをはじめ色んな地域の人々の習わしでありまして、たしかタリバン政権がカーブルを陥落させた一九九六年、私はその近くのジャララバードという町におりましたが、その時も皆歓呼の声でタリバンの旗を振って迎えました。つまり誰が来ても旗を振って迎えるんですね。所によりましてはタリバンの旗とアメリカの旗と新政権の旗とが並んで立てられている状態で、私達はとりあえずは争いませんとという意味表示だった。それをあたかも圧制が倒れてアフガニスタンに自由がやって来たという錯覚を残したまま忘れ去られていったわけです。

この自由の結果が六年経った今どうかといえますと、タリバン時代にほぼ消滅しておりましたケシが、この直後から復活いたしました。世界の非合法麻薬の九三パーセントを占めるといふ不名誉な地位に転落してしまつた。つまり復活したのはケシ栽培の自由、女性が街角に立つて売春をする自由、それから空爆で夫を失ったおかみさん達が街頭で乞食をする自由、外国人に取り入るのが上手で英語が流暢で、おべっかの上手なアフガニスタン人がますますお金持ちになつていく自由、これらが開放されたと言つても言い過ぎではない。アフガニスタンの今ほど荒れた状態は、過去私がいいた時期にはありませんでした。



ソ連軍の侵攻から始まってタリバンが来たり、色々な政治的な動きがありました。今まで私達の活動は殆ど変わったことはなかったし、これからも変わらないということに住民達に宣言いたしまして、あたかも何事もなかったかのごとく、活動を継続したわけです。

先ほど言いましたように、アフガニスタンというのは農業牧畜でなる国でありまして、私共としましては、国民の半分が飢えている状態では、まず食糧生産を上げること、これがアフガニスタン復興の基礎だということで、水の事業を継続すると共に、試験農場を開きまして、乾燥に強い作付けを研究し、その普及活動をこの六年間地道に続けてきました。現在やっと先が見えてきたものの一つは、さつま芋です。さつま芋そのものは昔からあったようですが、現地では案外知られてなくて、本格的な普及もされていませんでした。これが当たりだという感触を掴んだのが三年前です。

話が脱線しますが、日本人が良いと思っても相手にとって良いとは限らない。これは良いだろうと色々やってみても、皆さん「ありがとう」とお礼は言いますが少しも広がらない。ところがさつま芋の場合は、畑から芋が盗まれるようになってきた。これはしめたこととして、我々が宣伝しなくても良いものは自然と広がっていくわけですね。しかしそうは言いません、そのうち種芋がなくなってきたんで、二年前私は一計を案じまして、「さつま芋というのはつるからも増やせ



るので、つるから取ってはいかん」という噂をわざと流しますと、翌日からつるが盗られるようになってくる。こうやって少しずつさつま芋、他にも乾燥に強いそばだとか色々あり

ますが、このような地道な研究活動が現在も続けられております。

更にこれは私達の問題でもありますが、アフガニスタンを苦しめているこの大干ばつの元凶というのは、地球温暖化。これはどういうことかと言いますと、せっかく白い山の雪が積もりましても、昔は少しずつ溶けだしてきて、川沿いに豊かな緑を作っておりましたが、これが春先になりますと、気温上昇のために一挙に溶けだしてしまいます。そのために大洪水が頻発するようになるけれども、その後カラカラの状態になって砂漠化が更に進行してくるといのが、七、八年前から見られるアフガニスタンの最も危険な兆候であります。私達としては温暖化が続く限り、この砂漠化は収まらないだろうというのが見通しであります。それもすぐには収まらない。今、炭酸ガスが完全にストップされたとしても、回復するのに最低六、七十年かかるそうですから、恐らくこれは続くでしょう。残るは地表水の利用なんです。つまり、中小河川においては雨水を出来るだけ貯められるように無数の溜め池を作ること、それからアフガニスタンを源流とするインダス河の支流から、また六、七千メートル級の山々の雪は何世紀かは残るであろうという想定の下に、大川川からは大きな用水路を引くという形で対処しなければ、とても人々が生きていく土地を確保出来ないというのが私達の判断でありまして、その第一段として、全長二十キロメートル、そのうち第一期工事、最も難関である最初の十三キロメートル

ルの工事に着手したのが四年前のことでありました。こういった乾燥地帯がアフガニスタンに次々と広がっている。牧草が生え、所々には水田も見られたという所が、今はカラカラの砂漠になっていくという状態が、アフガニスタン全土で急速に広がっている。こういうことは殆ど報道されていないと思います。

私達としましては、もう井戸水だけでは間尺に合わない、とにかく計画を実行せよということで、水路に着工いたしました。と言っても日本のように豊富に機械があったり物があるわけではない。川を掘るのも、初めの内は地元の人々のツルハシとシャベルによって掘られたものであります。どうも日本人の奇特なドクターが川を作るらしいということで、大勢の人々が戻って来て私共を手伝ってくれました。もちろん日当を出しますけれど。水がやって来ますと、自分の捨てた乾いた土地が再び牧草地あるいは農地として使えるようになりますので、それによって自分達が生きていけるようになるわけです。こうやって地元住民達との必死の協力によって、仕事が始まりました。

今まで地元の人でも出来なかった所に水路を通すわけですから、何らかの技術導入は必要です。その時に大いに役立つのは日本の伝統的な土木技術です。日本がここまで豊かな生活が出来るようになったのは、明治維新があつて、欧米の色んな文明を取り込んで日本がここまで発展したと、私自身も最近まで思っていたんですね。しかしどうも違う。少なく

とも人間が生きていく上で大切な水利土木技術は、既に江戸時代末期には、日本は世界に冠たるものがありまして、私達



が採用したのは、現在、大手の建設会社がするようなコンクリートの大工事ではなくて、ほぼ武田信玄の時代、それから江戸時代に完成された日本の伝統技術です。これは「蛇籠」と呼ばれるものでありまして、要するに今では、針金で編んだ網の中に石を詰めて護岸に使うという、一つの護岸技術です。これが大活躍をしました。昔は竹籠と言って、針金がありませんでしたから、竹の籠の中に入れて護岸工事をした。私達もこの籠を自分達で生産しまして、この四年間で六百トンのワイヤーで 万五千個の二メートルの長さの蛇籠が生産されました。

これは水路が出来て三年後の姿であります。蛇籠の強靱さは立証済みでありまして、これは全部蛇籠を並べて出来た水路なんですね。更に両脇に柳を植える。柳施行と言いまし、これも日本人の知恵であります。蛇籠で組まれたものは何十年か経って針金が錆びて落ちましても、背面から柳の根が伸びてきまして、石の間にびっしりはまり込む。針金が切れても柳の根が生きた籠となって、その石を抱きかかえるようにして、強靱にこれを守ってくれるということでもあります。実際に土石流に襲われまして、崩れたかなと思ったら、ピクともしていなかったという実績があり、これは実証済みであります。

この四年間医者もしましたけれども、土木作業 などをしていました。

(八)

私達は住民に攻撃されたことは全くありません。危険地帯と呼ばれている所ですけども、住民に攻撃されたことは一度

もない。時々攻撃するものがあるとすれば、米軍のヘリコプターが面白半分に我々を機銃掃射していくだけであります。皆さんが聞かされているのは恐らく、あそこには悪いテロリストがいて、それをやっつけるために軍隊を派遣するんだということ。それが一般的な意見として通用していることに、私は非常に驚いております。とんでもない。私達が見たのは、誰をもってテロリストというかは別として、そこにテロリストがいるからと外国軍が出て行って、それをやっつけてみんなの暮らしを守るということは絶対がない。なかった。それまで平和であった所が、外国軍がやって来たために争乱状態になって、国がますます荒れていくというのが実態でありました。実際に私達が十何年も運営し続けてきた診療所が、米軍が入って来たばかりに、そこで争いが起きるようになって空爆が続く。それで危険地帯となって、我々はそこから撤退せざるを得ないという状態になりました。こうやって二つの診療所を失いました。だから皆さん色んな報道を聞かれているでしょうけれども、少なくとも私達が見た範囲で起きた事実というのは、悪い奴がいて、それをやっつけるために、アフガニスタンの国を助けるために外国軍や米軍が出て行って争いが起きているということではなくて、米軍及びその同

盟軍が出て行くためにかえって争いがひどくなって、ますます拡大していくということが実態だということとは是非伝えたいと思います。武力は結局何も役に立たなかったと私は絶対的な確信を持って報告する者であります。

私達は地元の人々と一体となって仕事をしておりますが、私達自身が武装勢力となれないことはない。というのは、アフガニスタンの農村においては、ちょうど武田信玄の時代と同じように農民と武士が未分化な社会であります。農民であるということは、同時に村を守る兵士でもあるということ。そして、待と百姓がまだ分かれていない時代の日本の農村社会に限りなく近い。だから「明日、日当を倍出すので、皆さんライフルを持って集まって来て下さい」と言うと、一千人前後の部隊はすぐにでも出来る。ある時、我々は機銃掃射を何度も受けた。とうとう怒った人々は「明日もし米軍の装甲車が通るなら、我々は彼らをインダス河の中に叩き込む」と言うのです。私はその時「待って待て、悪いことではないかも知れないけれども、まず水路が出来上がってからそれをやってくれ」と言いますと、いきり立っていた頭が少し冷めまして「そういえばうちは子どもが多かったな、子どもを養うにはやっぱ水がなきゃ」「うちの母ちゃんが水はいつ来るんだ、あんた頑張りなさいと言っていた」ということを思い出すんですね。そこでふと人間らしい気持ちに戻る。こうやって私達は住民と一体となって仕事を進めております。少なくとも、私達にとって重要であり、彼らにとっても重要である命の源



を大切にする限り、彼ら自身が我々を守ってくれるので、軍隊はアフガニスタン復興に絶対に必要がないというのが、私達の体験に基づいて言えることでもあります。

## (九)

これは冬のインダス河ですけれども、これも日本の土木技術の勝利でありまして、真夏はここ全体が激流になりました、幅一キロメートルから二キロメートルの大河川に変化します。日本の一級河川の数十倍大きい規模ですが、なんとこの日本の農業土木技術、これは斜め堰と呼ばれるものですが、これも、これにより、それまで住民を悩ましていた洪水に対して、春夏秋冬一定した水が得られるようになりました。こうやって、真夏になって洪水が押し寄せて来ても、水がその上を越えていくという江戸時代の取水技術を取り入れて、ほぼ取水口の水が足りなくなるとか多すぎるとかという悩みがなくなりました。

溜め池も造られました。アフガニスタンには大きな溜め池がありませんでしたが、これによって溜め池がアフガニスタンでも出来るんだということを実証しました。これも、うちの近所にある溜め池を模倣して造ったものであります。



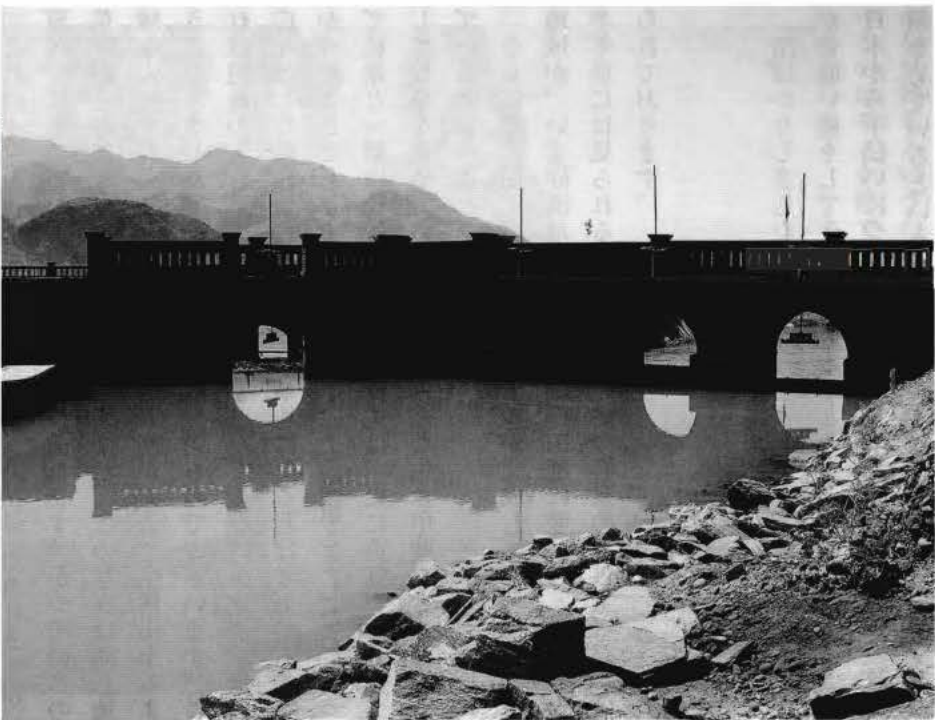
ら現在異常渇水で水が取り入れられない水路、そのためにトウモロコシや米が全滅に近い状態にあった所に私達の水を流して助けるといふ地域が千数百町歩、合計約二千ヘクタール以上の土地を養っております。

向こうの土石流はものすごいものでありまして、豊くらいの大サイズの石が流されてきます。そこを通過する、これはサイフォンという技術ですけども、これも江戸時代は樽をつなぎ合わせたりして底をくぐらせるといふ技術がありました。私達はコンクリートを使いましてサイフォンを造りました。

今年の四月になって、最も難しい最初の十三キロメートルが開通いたしました。今も工事が続けられております。現在十六、三キロメートルがもうすぐ完成しますが、更に二十キロメートルの地点まで完成しますと、およそ四千から五千ヘクタールの地域がよみがえり、十万人、多くすると二十万人の人々が生活出来る状態になるように造り上げようとしております。

更に水路は、高いところから低いところに向かって掘るといふだけではありません。初めの五キロは川と並行に流れますから、川の脅威を受けやすい。これも日本の伝統技術によって切り抜きました。

これは日本の「石だし」と呼ばれるものです。規模がひとつだけ違いますけども、これによって見事に私達の水路が守られたわけでありまして。これも日本の河川土木技術の勝利で、



これは堰板方式の水門、これも日本の技術です。

二年前から灌漑が本格化しまして、九月現在で直接私達が潤している面積は、九百町歩、九百ヘクタールです。それが



最近のコンクリートをふんだんに使った、機械と物量にモノを言わせたものではなくて、昔の方法で見事に制したという例であります。

これは十三キロメートル地点にある溜め池であります。現在では更にこの山の先に延びつつあります。かつてのこの荒野が三年後どうなったかと言いますと、この写真は同じ地域なんですね。こうやって多くの人々がここで生活出来るようになりました。それは本当に嬉しいものでございます。これは現地の人も見てびっくり。まさかこんな乾燥地帯が緑の広々とした耕作地、あるいは牧草地になるとは考えてもみなかったことでありまして、現地の人々も感激しましたね。残って私達と一緒に仕事している職員達は、更に勇気づけられまして仕事を進めています。まあみんな生き甲斐をもつてやっているということですね。

さらに第二期工事七キロメートルが完成しますと、広大な地域が、いま砂漠地帯ですが、緑の田園に変わるといのが半年後には見られるということで、今必死の突貫工事が続けられております。

(十)

話ばかりしましたけれども、じゃあアフガニスタンの人々が皆暗い顔をして生活しているかというところではなくて、日本から手伝いにやって来ている二十人の若者の方が、暗い顔をしているというのが現実ですね。それは私はずっと不



思議に思っていたことですが、どういうことか、明日死ぬかも知れない子ども達の方が遊んではしゃぎまわっている。確かに何も失うもののない人々の楽天性といえますか、おおよ



かな気持ちというのがあるわけでありまして、一般に人間というのにはモノを持てば持つほど、顔が暗くなってくる。お金

だけではなくて、物、地位、それから名誉。持ち物は増えれば増えるほどそれを守ろうとするんですかね。何か顔が暗くなってくる。

この二十三年間を振り返って思いますことは、初めのうちは、こちらは多少豊かなので貧しい人々に何がしか分け与えてあげようと、上から眺めているような傲慢な考えが無かったわけではありませんが、今、この仕事に携わって良かったなあと思うんですね。それはどういふことかといいますが、私達は本当は縛られなくてもいいものに縛られながら生活しているということ、現地の人々を見ていると気付くのです。人間が最後までこれだけは無くしてはいけないというものは何なのか、これは無くても済むんじゃないかということは何なのか、ということについてヒントを得た気がします。少なくとも私達は現在世界中を覆っている一つの迷信、それは、金さえあれば何でも出来るような錯覚、更に、武力さえあればこの身が守られるという迷信、これらから私達は自由になって、ものが見えるということでありまして。私達はこの活動を通して、日本の俗な言葉に、「情けは人の為ならず」と言いますが、まさにその通りでありまして、助けることによって自分が助かるという真理、これを学んだような気がするわけです。話が説教くさくなってきましたので、この辺で私の話を終わらせて、後は討論の中で理解を深めていきたいと思えます。どうぞご静聴ありがとうございます。



## 質疑応答

(括弧内に氏名のない質問は、一般の方からの質問です)

**中村** どんなことを聞かれましたも、怒ったり笑ったりしませんから、何でも聞いて下さい。こんなこと聞いたら幼稚かなと思うことでも結構ですから、どうぞご遠慮なく。

**質問 (生徒 A 一年)** こんにちは。僕は哲先生の話聞いて、先生は侍だと思います。

**中村** ありがとうございます(笑)。

**質問 (生徒 A 一年)**僕は質問が沢山あるんですけど、まずこれをお聞きしたいと思います。哲先生の大和魂は、アフガニスタンでどう関係していますか。

**中村 (笑)** 大和魂とアフガニスタンがどう結びつくかですか。これは神様が結びつけられるもので、私はたまたまアフガニスタンという目立つ所に行つて、政治に巻き込まれたりしながら、皆さんの前に立つ機会があるというだけのことです。

何を大和魂と言うかですが、私は、そこに倒れたり困っている人がいれば見捨てておけない、というのが大和魂の大事な側面だと思います。相手がどんなに権力者であり力があっても、理不尽なことは理不尽だとはつきり言う。それが大和魂と言うなら、大和魂を持った人は至る所にいます。たとえニュースにならなくても、例えば、お母さんが病気で倒れて大学に行けないという人もいますが、それを我慢して生活し

て、自分の良心に照らして、どうしたら自分の納得出来る動きが出来るか、その動きの中で決まって来るわけですね。初めからあの信念、あの方針と、固い方針をもってそれに邁進していく人というのは、立派な人もいますけれども恐ろしい人もいます。ブッシュ大統領というのは信念の人であります。世界中を廃墟にしても自分達と同じ考えにしないと取まらない人達は、私は恐ろしいと思います。ヒトラーもそうなんです。そういう信念を持つなということではなくて、君らがどんな状況でもいい、お母さんが病気で倒れたり、あるいは目の前の道端で人が倒れているという時に、それを見過ごして行くのか、それとも「どうしましたか、どこが悪いんですか」って抱き起こすのか。そういうたある事情や状況に遭遇した時に、これは人間としてすべきだということをする。そのことの連続で私共の運命が決まっていくという風に思います。

よく国際医療協力ということを聞きますけれども、私は実際という言葉はあまり好きじゃありません。たまたまアフガニスタンに行ったというのが正しいわけでありまして、ここがキリスト教の学校ですので、おおっぴらに言いますけれども、神の導きとしか言いようがないのが現実であります。「犬も歩けば棒に当たる」というのは言い過ぎですけども(笑)、まず歩いてみて、若い人の特権というのはたとえ棒に当たって倒れても、やり直しがきくということ。自分の良心に照ら

ている人も立派な大和魂だと思います。そういうことですから、アフガニスタンと大和魂がどういう結びつきがあるかと言いますと、ただ神様が結びつけられたとしか言いようがないですね。ただアフガニスタンという国は、私が気に入っている国民性の一つであつて、自分の命を投げ出してでも同胞のために尽くす、もちろん悪い人も沢山いますけれども、一度信頼を得ると、たとえ命を投げ出してでもその人を守る。こういった気風は、私が非常に気に入っている点ですね。この位で大和魂は勘弁して下さい(笑)。

**質問 (生徒 B 二年)** こんにちは。先生の話聞いてすばらしい活動だと思つたのですが、先生はどういうきっかけでアフガニスタンで医療活動をしていこうと決意なさつたのですか。

**中村** 決意というよりは、私は一九七八年、今から三十年前、山岳会の人間としてヒンズークシ山脈遠征隊に参加したのが初めてして、現地に行きました。その後何の縁があつてか、日本キリスト教海外医療協力が現地に行く医者を探しておりました。「君どうか」という話が私の方にまわつて来ました。まあ、あそこだったら私は一度生活してみたかった、ということでもOKしたというのが真相なんです。ですから、初めから海外医療協力という大志を抱いて、その気持ちが皆に伝わつて、盛り上がりつてという風な話分かりやすいけれども、決してそうではないんです。若い人に特に言いたいのは、犬

して、これは良いと思うことは、その事情事情で対応していけば、それが小さい事であれ大きな事であれ、同じ事じゃないかと私は思います。繰り返しますけれども、若い人の特権というのは失敗してもやり替えがきく。私達の年になりますと、失敗すると誰も許してくれないという状態になりますので、どうぞ思い切つて若い時に、これは良いと思うことを真っ直ぐやって頂きたいと思います。それが私の答えであります。

**質問** 先生のお話をお聞きして、先生の意図するところではなかつたのかも知れないのですが、マイナーなこと、小さな身近な目の前にいる人のことに対して目を向けるという活動に、非常に感動しました。

先生は精神科医だということをお聞きしていますが、今日の演題とは違う質問で申し訳ないんですが、お聞きしたいことが三つくらいあります。一番初めに、精神病院がなくてモスクに行つているということでしたが、薬はどんなタイプのものを飲んでおられるのかとか、現地の精神障害者の人達はどうのような生活を送つておられるのか。またもう一つ、精神障害者のその地域での仕事とか症状の状態について、具体的に聞かせてもらえたらと思います。

**中村** これは非常に良い質問で、日本で精神障害と呼ばれている人達の待遇と、現地での待遇とを突き合わせてみると、いずれが人間的か分かると思います。

まず現地では精神障害者というのは、日本と同じくらいの

頻度でいます。しかし、精神病院がなくても彼らはまたも家庭の中で生活が出来るのは何故なのか。これが日本の大きな違いであります。まず薬について言いますと、私は精神科医として思うのは、精神病に使う薬というのは暴れている人をおとなしくするという鎮静剤が多い。しかし現地にはこういった薬を買うお金がありませんので、皆気持ちでなだめるといいですか、周りが薬を使ってその人を鎮めるということをしない。この人をどうぞ神様、治して下さいという祈り、それから家族の人達の思いやり、これで気持ちを抑えようとする、これが薬となるわけであります。

更に精神障害者の生きていく範囲、社会的に受け入れるキャパシティが非常に大きいということです。農業牧畜の世界である現地では、それなりに役割がある。例えば水汲みの仕事だけをお前はしておけばいいということで、たとえ障害がありましても、みんながそれなりの仕事を与えて大事にするということがあるんですね。そういう意味で日本のように、お前役立たずだから施設にでも入っておけということは現地ではないし、施設そのものがまずありません。

更に、最近は統合失調症と言いますが、かつては分裂症と言いました。これも沢山います。あの人が暴言を吐いてもまともに受けちゃいかんとか、そういう風にしてそれなりに、みんなに自然に受け入れられるということです。もちろん妄想にかられて殺人なんか起こしますと、普通の人と同じようにその人も殺されます。同じような取り扱い、処罰を受

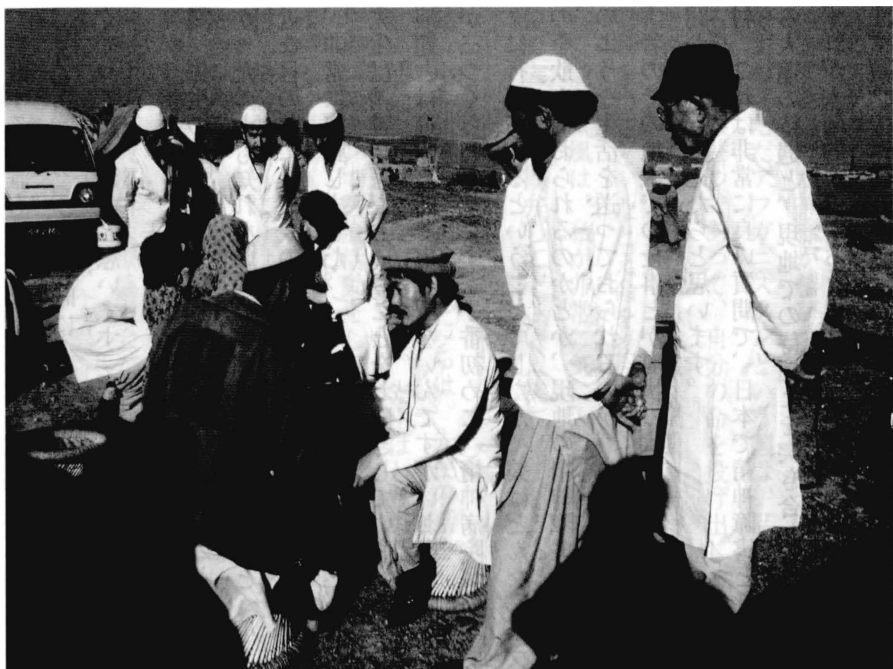
パシティは非常に大きいということに、改めて気が付いたわけです。

それから薬の効用についても、単に人工的に薬をやって鎮めるんじゃないかと、「どうぞ神様、治して下さい」「心配しないで、落ち着いて、落ち着いて」と肩たたいてやる方が、無理矢理口をこじ開けて薬を飲ませたり、注射するよりはるかに人間的じゃないかというのが率直な感想です。ただそういうことを精神科医の中で言うと、ひんしゆくを買いますので言いませんけれど、私はそう思っております。以上ですがよろしいでしょうか。

**質問** 今、お薬は必要ないんじゃないかとおっしゃいましたね。私うつ病で、抗うつ剤を飲まずに数年過ごしたことがあります。すごくしんどくて、抗うつ剤を飲んですごく楽になったことがあって、だから向精神剤が悪いと言えない気がします。

もう一つ伺いたいのですが、先生のご活動をずいぶん前から知っている者で、私はクリスチャンです。宗教のことについてお尋ねしたいのですが、先生がいらっしゃるのはイスラム圏ですね。私はキリスト教というものに救われてからも、一面疑問を持っております。一神教であるために戦争が起こってしまうわけですね。先生もクリスチャンということですが、その辺りのことでお聞き出来ませんでしょうか。

**中村** はい、非常に本質的な質問ですけども、まず、向精神



薬がすべて悪いと言っているわけではありませんで、これは文明の偉大な利器として、必要な場合は向精神薬としては大いに役立つということで、必要ないということではありません。訂正します。しかし一般的に日本で、特に統合失調症に使われる場合は、興奮状態を鎮めるといふ場合に使われるんですね。だから、人の言葉で慰めるよりも薬に頼ってしまうということが、あまり人間らしくない感じじゃないかということなんで、必要な場合はこれは使うべきじゃないかと思っております。実際現地でも私は使うことがありますので、その点誤解のないように願います。

それから、私がキリスト教徒であって、異教徒であるイスラム教の中、彼らにとっては私が異教徒なんですけども、その関係ということでしょうか。

**質問** イスラム教徒と、どんな風に共存していらっしゃるのでしょうか。

**中村** はい、これはですね、私共の信仰の本質的な問題に関わる点で、非常に大事なことだと思います。私達は人間の持っている、難しい言葉で言うと原罪の一つは、本当は人間が語り得ないものを、人間は言葉にして言わざるを得ない。話が難しくなりますけども、その言葉を実体と間違えてしまうとということが、人間の言葉の運命的な欠陥じゃないかと思えます。例えば私達が持っております神学、信仰にしましても、これは人間の言葉で組み立てられた一つのいわば理屈でありまして、言葉よりも先に実体があるということですね。神が



先にあるのであって、私達の言葉が神様を造っているのではないということ、これが信仰の根本にありませんと、他の宗教を排除したり、狂信的な動きになったりという風な傾向に陥りやすいと思います。

つまり、どういふことかというところ「十字軍」という言葉に象徴されるように、十字軍で一体何を守るのか、キリスト教を守るのか。そうやって守られるキリスト教とは何なのか。聖書のどこにも十字軍という物騒なことは書いていないですね。これは人間が発明した宗教用語、人間の傲慢を表す一つの言葉でありまして、我々が神を守るのではない、我々が神によって守られるのだというのが我々の信仰の基底にあれば、たとえ宗教は違っても、同じ山に登るのに登り道が違うだけだという謙虚さを持つことができるということです。だから私達の進んでいる道が良くない、何でもかんでも相対的だというわけではないですよ。それはそれとして歩みながら、違った道もあるんだということが分かって来るようになるんじゃないかと思います。

よくイスラム教徒からも聞かれます。「あなた、クリスチャンで不便でしょうが」「何が不便なんですか」「あなた、奥さんが日本にいて現地では一人じゃないですか。イスラム教徒になると、四人まで奥さんが持てますよ」「いやとんでもない、一人でも持て余しているのにそんなに二人も三人も」(笑)。そんな議論もありますけども、わりとイスラム教徒というのはおおらかなんですね。

他の宗教の人達にとっても大事なものであるということですね。そのことを是非とも心に留めておくべきじゃないかと思っています。これを自分の信心は大事だけでも、他の人の信心は無くしてしまえというのが、今の多くの欧米のクリスチャン達の欠陥であります。

例えば、「南無阿弥陀仏」と言って、「おじいちゃん、今からあなたの所に行きます」と言うおばあちゃんに対してですね、「あなた、アーメンと言わないと天国に行けないよ」とどうして言えるんですか。そういうことじゃなくて、「誰が天国に行くと言うな」ということは、私達が固く教えられていることなんですね。宣教が悪いということではない。しかし私達はこういう風にして、違った形で自分達のつくり上げた言葉によって、それを神よりも大事なものとします。このことが罪であるということ、私達は肝に銘じるべきではないかと思えます。

言いたいことは沢山ありますけれど、卑近な例で言うと、カール・バルトという神学者がいて、世界的に異端とされておりましたけれども、彼が他の反対者に言ったのは、「自分と似たような事を言う人がいるかも知れないけれども、決定的な違いがある。自分は自分の神学を笑うことが出来る。つまりそれは我々が発明したものだから、神様がそれを認めるかどうかは別物だ。しかし自分に反対する者は自分の神学、自分の考えを捨てることは出来ない。それにすがって生きていくことは出来ない。これこそが本当の罪なんだ」というこ

よく伝えられるのは狂信的な人の動きだけですから、イスラム教徒全体に日本人は誤解を持っていますけれども、私達が理解しているキリスト教も、考えてみるとヨーロッパ教の混じったものであることがしばしばなんです。クリスマスのトナカイなんてイスラエルにいたか、またクリスマスツリーに降っているあの雪が、あの中東の地域にあったとはとても思えないわけですね。つまりはヨーロッパ系のキリスト教でもって、それを我々はキリスト教と思っっているわけです。それが本当かというのは別として、例えば内村鑑三という人は、武士道こそ日本の旧約である、その上に新約が接ぎ木されなきゃいけないと言いましたが、私も半分賛成する者です。というのは、ヨーロッパ経由のキリスト教の中には、イスラム教や他の宗教に対する偏見があるということです。決してトナカイが悪い、クリスマスツリーが悪いと言っているんじゃないですよ。それはヨーロッパの習慣であって、その形で祝うということは少しも悪いことでも何でもない。ただしそれをやらないとキリスト教ではないという言い方は、これは人工的な発明に近いわけです。例えばエチオピアでは一月にクリスマスをするのを、イエス・キリストの誕生日と違うと言って、ヨーロッパ人が怒るのと一緒であります。

私は多様性、単に違うものを善悪の問題とし、あるいは自分の信念が絶対であるとする問題に置き換えますと、世界中が争いでいっぱいになると思っております。質問は非常に本質的なことであると思います。私達にとって大事なものは、とを言いましたけれども、私も全くそう信じます。それが大体私の中にありまして、キリスト教徒でありながらイスラム教徒と仲良くできる、大きな原因じゃないかと思っております。神学まで出てきて生徒の皆さんには話が難しくなりましたけれども、そういうことなんですね。

質問 (生徒C 二年) さっきの質問に似ているんですけど、先生は宗教の違いがあっても現地の人達と仲良くしようとしておられると思うんですが、現地の人達の方からの衝突があったりするんですか。また海外に支援しに行くという人で、こういうことを勉強しておけば役に立つということがあれば教えて下さい。

中村 これも良い質問ですね。宗教の違いを現地の人から言われたりすることは時々あります。多数派の人々が少数派の人々を馬鹿にしたりするということは、どこの社会にもありますね。キリスト教徒という現地では少数ですから、キリスト教徒側にするような発言は時々あります。しかしキリスト教徒側にはそれがいいかというところ、それも非常に強いですね。キリスト教とイスラム教は決して同居できない宗教ではありませぬけれども、先ほど言いましたように、ヨーロッパ経由で出来上がったキリスト教というのは、イスラム教を敵として自分達を結束させてきたという歴史のないきさつがあります。このような中でヨーロッパ社会というのが誕生してくるわけですね。そのためにヨーロッパ社会の根っこの中



に、反イスラム教的なものが含まれている。一種の偏見ですね。これがヨーロッパ社会の一種のダニであります。もちろんそのことに対する反省がヨーロッパ文明の中にありますけれども、ヨーロッパ文明そのものの中に反イスラム的のものがあるということ、そして更に悪いことには、日本人がこういった西洋人が持っているイスラム教に対する偏見を引きずって歩いているということ。このことは単にクリスチャンだけではなくて、日本人全体がそういうムードに支配されているような気がしてならないですね。

だから先ほど言いましたように、サンタクロースがああいった砂漠地帯に現れるとは思われないし、トナカイが歩いているわけでもない。せいぜいラクダか羊くらいだと思わんですが、そういうことを考えますと、恐らく旧約聖書に書いてあります聖書の原風景に、最も近い面影を留めているのは、むしろイスラム教ではないかと私は思います。復讐するなど新約聖書に書いてありますけれども、私達がそれを聞いて、人を殴り返したりするのはよくないと思うのはその通りなんですけども、聖書に書いてあることはそれ以上の強烈な意味がある。というのはああいっただ遊牧社会にありましては、復讐というのは絶対的な掟なんです。うちの家族が三人殺されれば、相手の家族を三人殺す。二万人の空爆があれば二万人の外国兵を殺す。これは絶対の掟であります。しかし、イエスキリストが言ったのは、そういった掟を越えたものを指しているんですね。復讐をやめろというのは、そういった人間の

うも話が大きくなりますけども、平和の基礎というのは、人は人の心の中にあると思います。もちろん戦争させない、あるいは憲法で禁じられている戦争をしないということも大事ですけども、私は平和というのは、人間の心の中に築かれなない限りは、本当の平和は来ないんじゃないかと思うんですね。平和というのは色んな意味に使われます。みんな人殺しのために戦争やるんだということは、一つもありません。アメリカのブッシュ大統領は、世界平和のために戦争をするんだと言っている。日本もかつて東洋平和のためなどと言って、中



作った掟に縛られず、本当に命を大切にしようなことをしなさいということを行っているわけで、その点が私達がイスラム世界に行つて、キリスト教に対する思いを深めるということにも繋がって来たんじゃないかと思えます。だから決して同居出来ない宗教ではない。もちろん偏見は人間が人間である限り、違いがある限りなくなりません。けれども、少しでもそれを和らげる努力をすべきじゃないかと私は思っています。そういうことで私達が自分達の信心を大事にするように、相手の信心も大事にするというのは自然に出てくることじゃないかと思っています。なかなか回りくどい答えですがそれでよろしいでしょうか。

それから海外に行くに当たりまして同じことであります。やはり自分に見慣れないものに対して、そういった価値判断をしないということ。好き嫌いは別ですよ、どうもこの中華料理の味は嫌だなというように、好き嫌いはあります。でもそれが良い悪いの問題じゃないということ。心に留めておくことが非常に大切な点じゃないかと思えます。いいでしょうか。

質問(生徒D 二年) こんにちは。先生が求める世界の平和は一体何ですか。そのためには一体僕達は何をしたら良いと思えますか。

中村 これも現在あちこちで戦争があったり、殺人があったりする中で大事なことでありまして、世界平和というと、ど

国や東南アジア各地で戦争を繰り返したといういきさつがあります。平和という場合に、単に戦争がないという状態だけではなくて、本当に自分達がそこで落ち着いて安心して暮らせる状態、そしてそれが人々に迷惑をかけないと言いますか、自分達だけが楽な生活をして、平和だ、平和だと言って、貧しいところを放っておくというのは平和とも言えない。

昔から日本で言われている言葉に、修身(身をおさめる)、齐家(家をおさめる)、治国(国をおさめる)、そして天下が平和になるという言葉がある。「修身齐家治国平天下」その通りでありまして、私達自身が平和な気持ちにならなければ、世界平和だと唱えておきながら人殺しをする、爆弾の雨を降らすということも起こり得るわけでありまして、私達は本当に人間らしい温かい気持ちを持つことが大切であります。これはもう二千年以上も前からモーセの十戒に書いてあるような、殺すな、盗むな、姦淫するな、汝の父母を敬えと書いてある通りのことを実践する、このことが世界平和に繋がって来るんじゃないかと思えます。世界平和を唱えながら、友達をいじめ、世界平和を唱えながら家の中が乱れるということでは、私は本当の平和とは言えないんじゃないかと思えます。

私達は現地において、この仕事をしてよかったなあと思うことの一つに、荒野に緑が帰って、散り散りになっていた家族が戻って来て、そこを自分達で耕して平和な生活が出来るようになる、この事も平和だなあという感じがする。平和とい



うのは色々な意味に使われますけども、それは人間同志の平和、家族の中の平和、人と生き物の平和。何でもかんでも売れるからといって、動物や魚をやたらに捕って食べるというのではなくて、やはり人も動物も植物も、食べたり食べられたりしながら共存しているという平和。だんだん説教くさくさなってきたけれど、聖書の中に、その日幼な子が蛇の穴に手を突っこんで蛇と一緒に遊ぶ日が来る、ということが書いてあります。決して武器だとか、意地悪な気持ち、敵意でもって平和が来ることはない。自分の心の中から平和な気持ち築きあげなきゃいけない、私自身はそう思っております。世界平和のためにアフガニスタン報復爆撃を行うというのは、真つ赤な偽りだということをお願いしたいと思います。平和のことというのは大きい問題ですから、今日はこれくらいで勘弁して頂きたいと思います。

質問 (生徒 E 一年) 今日お話を聞いて、日本とアフガニスタンとの違いを知って、凄くショックでした。餓死者が沢山いたり、ましな水さえあれば病気になるという聞いて、日本だったらそんなことないのに、という事がいっぱいあってショックだったんですけど、人類みんな兄弟とか、聖書の中に貧しい人に施しなさいっていうんだったら、私達には一体何が出来るのか教えて下さい。

中村 これも皆さんが持っている大きな疑問じゃないかと思えます。じゃあこの日本にあつて、何が出来るんだらうかと。

達の真似をしないということは重要だと思えます。皆さんはこの日本を見ていて、大体大人が言っていることをその通りにしていけば間違いないと思っている若い人が多いのですけれども、とんでもない。このまま行くと破局が待ち受けているというのが、現地から帰って来てひしひしと思うことでありまして、このままだと、こんな世の中長続きしないと思えます。

自分のことを言いますと、二十年もすれば惚けるか死ぬかのどちらかで責任が取れませんけれども、この後始末をしななければいけないのは君達ですから、大人が言うことを鵜呑みにしない、とにかく自分が良いと思うことを真つ直ぐやってみること、このことを勧めたいと思います。

私達に何が出来るんだらう。それは水を節約することでもあり、病気のお母さんを看病し続けることでもあり、自分の遭遇した出来事に対して、自分の良心が納得するようなことを真つ直ぐする、これであれば私は何をしても許されると思っています。たとえ、後で間違っているより、もつと大きな事をしなくちゃと気付くことがあります、それは決してマイナスにはならない。

「私達に何が出来るんだらう」というのは、誰からもいたなく質問ですが、本当は誰にでも出来ることはあるということですね。ただ身近な所からやらなくては、突然ジャンプしてアフガニスタン問題ということにはならないのではないかと。困っているところは沢山ある、アフリカ

私は色々その人の置かれた立場で出来ることをやれば良いと思うのです。何も今学校を辞めてすぐ手伝って欲しいんだとかいうようなことは、我々は求めません。その置かれた立場で出来ることは沢山あるわけです。

数箇月前ある会場で中学生が立ちまして、水の問題を自分は考えているけれども、自分が出来るのは水道の水を節約して使うことぐらいですが、それでいいんでしょうか、という質問があつたんですね。私はそれは立派なことだと思えますね。その人にしか出来なくて、他の誰にも出来ないということはあるわけでして、たかがあなたが水道の水を少し節約したくらいで水問題は解決するもんですか、と大人達は言いませぬけれども、その大人達でさえ、そういう事をしていないわけなんです。そういう小さな積み重ねがやがて大きな実を結び、水問題というもつと大きな問題につながっていくんじゃないかと思えます。だから今何をすべきかということと同時に、何をしたらいけないかということも、まず考えなくちゃいけないと思うんですね。

まず武力に訴えない、これも大事なことです。現在日本に帰ってきてびっくりしましたけれども、洋上給油というんですか、自衛隊が軍隊に油を補給しているのを国が認めるかどうかということを一生涯懸命に議論している。爆弾を落とされる側から見ますととんでもないことでありまして、個人のレベルで言いますとこれは殺人ほう助罪(殺人を助ける行為)なんです。これをまともに議論している大人達、この大人

にもあるし、南アメリカにもあるし外国といわず日本中、自分の身の回りにも沢山ある。これを黙って見過ごさないこと、これが大事なことじゃなからうか。勿論、私の話を聞いてペシヤワール会に募金をするというのも歓迎しますけれども(笑)、決してそれだけじゃない。回りくどくなりましたけれども、これがわたしの答えです。

質問 はじめまして、近所で野菜を作っております。私は日本の憲法九条は世界に誇れるものだと思っておりますが、その憲法九条をなくした時に、現地での活動に支障が出るのかどうか、それをちよつとお聞かせ願いたいのですが。

中村 憲法九条というのは、具体的には現地の人々はほとんど知りません。でも先程も言ったように、日本には何がしかの平和的な掟があるということは知っていますね。向こうの言葉で言えば、「掟」と言わざるを得ないわけですが、たとえば我々が、大人も知らない非核三原則なんてことを、現地の田舎の人がよく知っているんですね。日本は決して武器を売らない国だということもみんな知っています。これがまだまだ対日感情の良さを残している。そういうことですね。ですから憲法九条そのものは、具体的には知らない人が多いですけど、今度インド洋上で軍用の油を配っていたということが現地でも話題になっていまして、今これがきっかけで憲法九条というものがやつと現地にも知られるようになりまして。先程の答えと直接関係はありませんけれども、私達が注



目して見ているのは、憲法九条が知られるようになったのはいいけれど、今まで日本が戦争に必要な油を配っていたということが話題になったがために、現地の人々が知ってしまった。えっ、そんなことをしたのか、ということになりました、もしこの洋上給油が継続されることが決定されますと、恐らく対日感情は一変して悪くなるということは目に見えている。

逆に憲法九条に則って、これを否定するという方針が打ち出されますと、やっぱりそうなのか、日本は憲法九条という掟によって外国に軍事干渉をしない国なんだということ、日本の株は上がるでしょうね。私達は胸を張って、日本人としての誇りをもって仕事が出来るとなるという風に思っています。どうぞ平和に野菜を作り続けて下さい。

質問（生徒 F 二年）先生は色々の活躍をしておられますが、息抜きでやっていることとか、これからアフガニスタンでやってみたくありませんか

中村 もう遅いですけど、息抜きでやってみたくことは、やはり昆虫採集ですね。私は昆虫採集がもともと趣味で、それから山々に出かけるようになって、ヒンズークシ山脈に行ったわけです。この話をすると時間が過ぎてしまいますのでませんが（笑）、ヒンズークシ山脈あたりはモンシロチョウのふるさとなんです。今日の平和の水源とは直接関係はありませんけれども、モンシロチョウの原産地は、だいたい

中村 向こうでは、昔の日本と同じように、男の人と女の人と役割が違って、外まわり、力仕事は男の人、家の中の切り盛りは女の人というように役割分担が決まっています。それでもって差別というつもりはない。というのは、一見女の人は陰に隠れて、表に出してもらえないように見えませけれど、家に帰ると男の人は女の人にペコペコしているの、私は個人的にはあまり同情しておりません（笑）。何を言いたいのかと言いますと、その社会において男の人、女の人の役割が変わっていくんですね。今の日本の男女の役割を、そのまま現地に当てはめて、女の人がいじめられているとか言うのは、本末転倒ではないかと思えます。

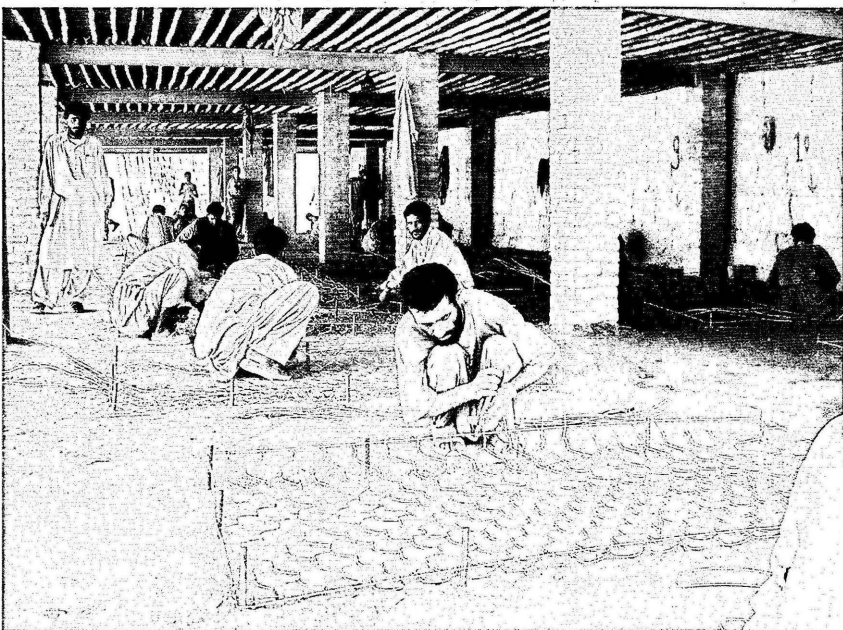
たとえば、先程食糧配給のことを言いましたが、あの空爆下、いつ死ぬか分からないという所に、みんなを引き連れて行ったのがうちの副院長先生でした。「お前は立派な奴だ」など言うと、「私は家内から、自分の国の人間が空爆で死のうかという時にあなたは黙っているのか、それでもあなたはアフガニスタン人か、と尻を叩かれまして、半分家内に強制されて出て行った」ということを聞くと、本当にアフガニスタン人が女性を虐待しているかという、私は非常に疑問を持ってあります。もちろん家庭によって違うんですね。女性が虐待されている家庭もある。しかし民主主義の世の中になると、みんな幸せな家庭生活を送っているかというところも思えない。やっぱり、それはその時代その時代、その地域によって幸、不幸というのは共通のものがあって、ス

今のパミール高原から中央アジアにかけて、ヒンズークシ山脈にかけてなんです。昆虫というのは、ある特定の植物と関係があるんですね。シロチョウ科の、これは覚えなくていいですよ（笑）。シロチョウ科というのは、菜種の仲間の植物と関係が深く、幼虫が食べる植物は決まっているわけなんです。それでモンシロチョウは菜種、大根といった、一般に十字花科と言われる植物と共に、日本に渡来して来たと推測がなされているわけなんです。じゃ、その原産地には菜種が必ずあるはずだということで、一体どういう植物があるかが興味があって、現地に行ったのです。

何の話だったっけ。ああ息抜き（笑）。水が流れてくると嬉しいことの一つは蝶が増えてくるんですね。昆虫が増える。もちろん他の動物も、魚が入ってくる。魚を狙って鳥が入ってくるんですね。わけても、食事係の人は嫌がりますが、柳につくカミキリムシがいるというと、私はすぐ飛んでいって仕事のふりをして、それを見る（笑）。これは珍しい種類で日本には少ない。一体、一日にどれくらい食べるのかということとを調べた。というのが、ひそかな息抜きになっておりますが、公には言えない（笑）、というわけです。まあ、そのくらいでしょうか。

質問（生徒 G 二年）水源地を作っている時、女の人も一緒に作業をしたりするのですか。

タイトルだけでは決められないということですね。誰でもいいお父さんお母さんを持つことは幸せですし、誰でも自分の好きな人と一緒におれるというのは、いつの時代でも、どんな体制にあっても幸せなことのひとつなんです。私はそういう風に思っております。水汲みその他、女の人は出て来ます。子





どもの頃は区別なく男の子と一緒に遊んでいますけれども、大体十二、三歳以上になって来ますと、男の人と女の人は分かれてくる社会となっているというのが一般的なことですね。そういうことです。いいでしょうか。

**質問（生徒H 一年）** 先生が出ておられるNHKのビデオなど見せて頂いて、現地のアフガニスタン語でしょうか、上手にしゃべっておられるのを見せていただき、どのように学ばれたのか、また小さい頃から、そのようなことに興味があったのかを教えてください。

**中村** これは現地に行つて勉強しました。もともと私は外国語は好きで、英語、それから大学に入つてからは、私達の時代は医者ドイツ語を勉強させられたので、言葉は好きでしたね。しかしベルシャ語だのパシトゥール語だのウルドゥ語などは、日本では一般的ではないので現地で患者さんやスタッフから学びながら覚えていったことです。初めは通訳を立ててやっていたけれども、相手がお腹が痛いといっているのに通訳が伝えるうちに、それが頭痛になったりする事があって（笑）、困つたので直接患者と話すというのが医療関係上欠かせなくて、患者に聞いたり職員に聞いたりにして勉強しました。

**質問（生徒I 三年）** 困つたこととか、嫌なことがあると思うのですが、そういう時支えとなつてくれるものとか

に九九、九九%行きたいです。命のことなんか考えたら○。○一%はちょっと怖いなと思つて、思い留まるんですけど、その話は置いておいて（笑）、どうやったら現地に行けますか。教えてもらえないでしょうか。

**中村** 今でも来ていいですよ（笑）。ただやっぱり学校をちゃんと卒業して来て欲しいというのはありますね、まだ高校生ですから。大学を途中で辞めて来るくらいなら、お前大学に行つても、大したこと覚えられないから、もう来いということと言いますけれども、せめて高校くらいは出るといことは、向こうで役立つ技術も沢山ありますから、微分積分も必要になってくることもあり、私は今それで苦労しているんですね（笑）。水の計算とかするのには微分積分が必要なんです。だから今習っていることは、決して先で役立たないということとはありませんので、まず高校を卒業し、お父さんお母さんの許可を一応得て来れば歓迎いたします。それと現地は治安が非常に悪い所で、残りの○。○一%がなくなつたところであらしゃいと言いますので、一度ベシヤワール会の事務局の方に、「行きたいです」と登録していただければ、いつでもお呼びします。

だいたい早とちりの人しかあんな所に来ない（大笑）。

**司会** いつまでも先生とお話していただきたいですけども、実は三十分後にはここを発たれなくてはいいけませんので、これで質疑応答は終わりに致します。

あつたら、教えて下さい。また支援活動をする中で、これだけは許せないとか、曲げられないという信念があつたら教えて下さい。

**中村** そうですね、嫌になつたこととか、もう帰りたいと思うことは何べんもありましたね。自分だけが何でこんな不幸な目に遭わなきゃいけないのかと思うことはあつたわけで、その時、支えというか、むらむらと起きてくるのが、これは皆さん理解しにくいかも知れませんが、彼がいみじくも「侍だ」と言つた気持ち、「こんなことで日本の男が黙つて引き下されるか」という気力ですね。これは大和魂と言えれば納得してもらえるかも知れませんが、そういった日本人としての誇り、人間としての誇りと言つてもいいかも知れませんが、それが一つの支えといえれば支えでありましたね。

それから、どうしてもこれだけは譲れないというのは、これも性格によると思いますけれども、自分の力を権力にして武器にして、それを背景にして理不尽なことを言う人、こういう人に対して、私は一步も譲つたことがありません。特に強い人達が自分達の権力だとか、あるいは武力を利用して弱い人を脅す、これは私は譲れないと思つております。まだ他にもありますけれども簡単に言うと、やむにやまれぬ大和魂（笑）、そういうことでございます。

**質問（生徒A 一年）** こんにちは、再び（笑）。僕の性格は早とちりなんです。僕ははっきり言つて、ベシヤワール

